

0円コーヒー

北海道恵庭市 佐々木

晋(56)

三十年前、バリ島に長期滞在した時、朝はまず近くにある屋台にコーヒーを飲みに行った。屋台は老婆がひとりで切り盛りしていた。コーヒーを注文すると、コップ（カップではない）に熱いコーヒーを淹れてくれる。砂糖が大匙山盛り二杯入った甘いコーヒーだ。

「バリは暑いから、朝から甘いものでエネルギーを満たさないと一日すげない」とのことだった。値段は、英語しか使えない時は一杯10円だったが、インドネシア語ができるようになるのと5円に下がり、片言でもバリ語を話し始めると2円になった。外国人からは高い料金を取るけれど、親しい人には原価を割る低料金で提供するのだった。

コーヒー代が最安値、つまり親しい間柄と見なされるようになった頃、老婆が悄然とした様子で「もうすぐ正月なのに」と溜息をついていた。ピンときた。

正月のご馳走を用意するお金が無いに違いない。私が正月料理の材料費五百円を用立ててあげると、その日以来コーヒーは0円になった。ただでコーヒーを提供するなんて初めてのことだよ、と老婆は満面の笑顔で言うのだった。

バリの正月はニュピといって、静寂の中で一日を過ごす。家の敷地から外に出てはいけないし、仕事どころか家事すらも一切してはいけない。電気も火も使うことも禁じられている。つまり、前日までに正月用の料理を作り終えて、元旦はそれを食べながら家族で静かに過ごすのだ。

ニュピの前夜十一時ごろ、屋台の老婆が私の宿にやって来た。

「あなたのおかげでご馳走を用意することができた。明日はこれを食べてください」と料理を持ってきてくれたのだ。さらに、魔法瓶いっぱいコーヒーを淹れてきてくれた。

ニュピの朝、静けさの中でコーヒーを啜る。ぬるくなっていて、甘ったるかっただけれど、私のことを慮って用意してくれたコーヒーは格別な味がした。